

[COMMUNION]

WEB: <http://www.nskk.org/tokyo/index.html>
E-mail: comm.tko@nsk.org
PHONE: 03-3433-0987
FAX: 3433-8678 Diocese Office

東京教区時報【ペンテコステ号】

コミュニオン

第4号 (通巻1239号)

2012年5月27日

編集: 広報委員会 委員長: 渡辺康弘

日本聖公会東京教区

港区芝公園3-6-18

《ペンテコステメッセージ》

その時は突然やってきた

―あの日の出来事は

今も続いている―

主教 アンデレ 大畑 喜道



久しぶりに教会の草むしりをしました。毎年花を咲かせていてくれた草が枯れてしまつてがっかりし、新しい花を植えようと思い立つたからです。そうしたら枯れ枝だと思つていた所から新芽が吹き出していたのです。いままでは草に覆われていてしまつて、雑草に妨害されていましたが、今はすっかりきれいになりました。また花を咲かせ心を和ませてくれることを心待ちにしています。それと同じように、私たちには神様からの大きな恵みが与えられています。聖霊の働きが今日もあることを確認したいと思えます。神様はいつも私たちを喜びに充ち溢れさせ、疲れた私



神田キリスト教会の橋本司祭牧師就任式

した。イエスの宣教が失敗したから、もうこの世に救いはない。みんなが絶望しているその現場に、「突然激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえた。」と聖書は伝えていきます。神からの一方的な恵みです。誰もそれを予想して待つていませんでしたが、突然に降ってきたのです。神からの霊が「安心

発させてくださいます。「聖霊来て下さい。」と本気で祈るならば、すべての人に聖霊が働き出します。そして私たちの想像を超えて、努力してきたこと、人のわざを吹き飛ばしてくださいます。圧倒的な神の霊による恵みが実現します。目の前でイエスが十字架で殺されたとき、弟子たちは、もう絶対無理だと諦めま

しろ、大丈夫だ。私が働く。怯えるな。」という音が天から響き、弟子たちの上に注がれたのです。その出来事は過去のことでなく、今もここで起こっていることです。私たちは諦めの心を払拭することができません。勿論、自分だけの力でそれを解決しようとしても無理です。聖霊を願うしかありません。人それぞれに大きな悩みもあるでしょう。迷いや悲しみが、絶望が心を支配してしまっている人もいるでしょう。神様に敵対する悪の力は、人を恐れさせて、無理だと思わせます。しかし教会には聖霊が働きます。聖霊の喜びに満たされます。もう駄目だ、無理だという時にこそ聖霊の力を信じてやってみよう。教会は今日までずっとそれを信じ続けてきたのです。教会の誕生以来一日も欠けることなく続いてきたのです。想像をはるかに超える神の力を信じ続け、その喜びを世界に発信し続けて行きましよう。

大学生から学んだ教会の課題

―立教大学の講義から―

千住基督教会／葛飾茨十字教会 司祭 香山羊人

※昨年の下町教会グループ研修会「チャプレンの働き」の中で4名の司祭、聖職候補生の方から興味深いお話を伺った。今回、その時に香山司祭が話された立教大学での講義内容のまとめから、今の大学生がキリスト教に対してどのような思い、考えをい

だしているのか、その一端を知る機会として、ここに掲載させていただくことにした。

2011年度「批判から学び直すキリスト教」を受講したのは約130人。大半は福祉、観光、心理の3学部、12年生ですが、全ての学部と学年が参加する「全学共通カリキュラム」の一コマです。聖書やキリスト教の魅力をストレートに表現する、あるいは第三者的な立場でそれらを解説するような授業ではなく、批判的論点からキリスト教にアプローチする授業です。企画と準備はわたしが行い、授業は空閑准教授とともに進めました。ゲスト講師の講義と討論、学生からのコメントに次回応答するという形式です。

キリスト教を知りもしない学生たちにいきなり批判かという心配の声もありましたが、単なる悪口ではなく責任ある参与としての批判が発点です。「愛の反対は無関心である」というコルコタのテレサの言葉を紹介し、関心

を寄せればこそ批判的視点も出てくるのだ、仲間の欠点は大目に見るという馴れ合いではなく、痛みを伴いつつ批判的にかかわることは最も責任的な参与の仕方、深い関心と愛情のなせる業だという考えで授業は進みます。

「牧師の授業だからキリスト教の宣伝だと思った」という先入観で臨んだ学生は、「内部批判、自己批判を容認できるところがキリスト教の強さ、健全さだ」と気づきます。そして、これまで多くの宗教に抱いてきた疑問、嫌悪感の正体が、独善性、排他性、批判や疑問を許さない態度に対するものだったのではないかと考えるようになりました。自分たちこそは正しいと思

い上がり、ここに来れば救われると言わんばかりのメッセーじに好感を持つ人はいないはず。しかし、外から見るとキリスト教はそんなにいいから

スラムのように戒律が厳しくないから／自分の価値観を捨てきらなくてもいいから／多様性を認めてくれるから／「救世主思想」を求めるから／批判によって鍛えられた内容の確かさ／安心してすぐれる絶対性／役に立つ教訓／イエスの教え／イエスの魅力（愛、救し、人格全体）／宗教としての安定感（変わらない教え）／人間の普遍的な理想が描かれていて誰もが共感できる／直観的な善の感覚に沿いやすい／裁きと救いの両方で人々をひきつける／有名だから／キリスト教文化の華やかさ／洗礼というシステム／矛盾点がかえって神秘的で魅力的／キリスト教の良い部分だけを見る人が多いから



受講した学生の中で、自分分はクリスチャンだと表明した（毎回提出するコメント用紙にそう書いた）学生は3人です。それ以外に特定の宗教に帰依していると表明する学生はいませんでした。つまり、いまだキ

・信者はキリスト教のどこに魅力を感じていると思うか
・親しみやすさ／人間味／分かりやすさ／完璧ではないところが魅力的／イ

い集団と思われている、回を増すごとに率直になっていく学生たちの反応から多くを学ぶ機会でもありました。

批判といっても、その土台から全く否定するような批判ではなく、聖書の教えから逸脱した教会の現実や不自然な教理に対する批判が中心となります。ラス・カサス、ユング、ジョン・バチエラーなどの人物の他に、カルト宗教、しょうがい者、ジェンダー、戦争、植民地主義、格差社会などがテーマとなりました。「宗教とは本来的に、暴力や抑圧を正当化するのではなく、社会的弱者の置かれた状況を是正し、すべての存在の自由と価値と尊厳を主張し、これらを実現すべきものである」という定義（川橋範子『ジェンダーで学ぶ宗教学』）を土台に、それに反する現実を直視しながら、「だからキリスト教はダメなんだ」という次元から「人間それ自体の問題、貪欲さ、ずるさの問題」へと視点は移ります。そう

なるとき、自分たちの弱点や欠点をごまかさず積極的に向き合って対決する姿勢、批判的アプローチが持つ健全さの意味が明らかになっていきます。

それまで内心感じていたキリスト教に対する違和感、嫌悪感を積極的批判というフィルターを通して掘り起こすことで、学生たちは次第に、単なる悪口ではなく責任ある関わり方の一つと

う、と学生たちが推察した内容です。もちろん授業の流れの中で出てきたものですが、「教会外」からの貴重な声です。

ずいぶん見くびられたものだと思うでしょう。なるほどそういう面もある、実はそういう面もあるかもしれないと思わされる内容もあるのではないだろうか。「人間味がある、完璧ではない、批判を認める」などをあげた学生たちは、この授業を通してキリスト教に魅力を感じた人々でしょう。神父だったラス・カサスが教会と対決する、クリスチャンだったユングが原罪の教理に反論する。こうした学びは宗教に寄せられる疑い（マインドコントロール）に対する答えにつながります。チャプレンや牧師がキリスト教の問題点を取り上げることへの驚きもあったようですが、「かえって安心した」、「まともな宗教だと思う」、「教会の説教よりこの授業の方が伝道的」という声も寄せられました。しかし、「ではなぜ先生はキリスト教をやめないのですか」という問いも提出されました。

この問いがなければ、なぜわたしはクリスチャンなのか、わたしにとっての信仰とは何かを語ることはできません。この問いなしに一方的に語り始めてもおそらく学生たちは耳を傾けてくれないでしょうし、一方的な宗教宣伝

しての批判の重要性和困難さを理解します。そこからさらに、キリスト教あるいは人間にとって大切なことは何かというイメージを徐々に描き出すようになります。前半ではなかなかつかみきれなかったこの授業の趣旨が共有され、面白味が増してきた後半、空閑准教授の提案で学生たちにこんな問いかけをしました。

「キリスト教には様々な問題があり批判もされてきたのは学んだ通りだ。にもかかわらず、キリスト教は世界最大宗教であり、世俗化した先進国でも強い影響力を発揮し、多くの人を引き付けている。キリスト教徒にとっての信仰とは何だと思うか、なぜ人々は教会に魅力を感じるか」と

客観的事実を調べよということではなく、自分はどう思うという意見を率直に書いてもらいます。外部の人々からクリスチャンはこう思われている、というデータ収集です。キーワードだけを抽出し便宜的に分類したのが以下のものです。

・なぜ人は宗教を必要とするのかという観点から

・不安を抱えた現代人にとって心の拠り所、とりあえず信じてみる／大震災など人知の及ばない苦難に直面すると神に祈りたくなるのが人間／人間にはだと思つて反発するだけではないでしょう。キリスト教に対する批判に

対し、そんなことは無いと抗弁したりこんないい面もあるのだぞと反論するよりも、批判の重要性を積極的に認めてより良い方向への変革の努力を示す方が誠実だし真実味があるはず。悪意の中傷には返す言葉はありません。偏った知識で揚げ足を取る人はより広い視点へと導く必要があるでしょう。そして教会を愛するがゆえにあえて苦言を呈してきた人々の声は傾聴に値します。キリスト教にとって最大の批判者はイエス・キリストだというわたしの立場は学生たちに理解されたようでした。学生の多くは、神は問いに答を与える存在、宗教は正しい答えを教えるものと思っていたかもしれせん。けれども人間の問いに神は別の問いを投げかける、問いは神が発するのであり、宗教とはその問いへの応答の実践であり、この正解無きスリリングな問答は無限に続くだろう、とわたしは伝えたかったのです。

どんなに見当違いな回答にもめげない神は、また新たな問いで人間の良心を呼び覚まそうとする、それが聖書の神の愛し方だと思う。このメッセー

「司祭と語らう」

(その2)

司祭 竹内 謙太郎

今回は、長年の牧会経験と豊富な学問的知識を持たれている東京聖テモテ教会の竹内謙太郎司祭(囑託)に、同教会信徒の荒川温子さんと飯塚哲二さんからお話を伺っていただきました。



― まずは先生が教会へ行くようになったきっかけからお伺いしたいのですが。

竹内 僕は軍国少年でね、終戦をむかえたのは中学2年の時。空襲ですべて焼け野原になり、行く所もなく目的も失った中で、若い人たちのたまり場になっていたのが教会だった。その頃行っていたのは家から歩いて2、3分の所にあった東京諸聖徒教会で、僕はその幼稚園の出身だったから、ごく自然に行くようになったという感じかな。でも、若い

人はそのうち少しずつ教会から離れていったよ。

― そんな中で、どうして洗礼を受けられたのですか。

竹内 僕は、信徒でもないのに勝手に日曜学校の先生をしていたから、まあ、教会に捕まったという感じかな。そのうち当時の蒔田主教に「お前は洗礼を受けろ」と言われ、受けることになった。

― 先生は慶応の出身ですが、どうして神学院に行かれたのですか。

竹内 僕は在学中から小山の修道院に行き断食なんかもしていたから、それで蒔田主教に「神学院に行け」と言われた。とにかく強引で、按手式もいきなり「来週するから」とか、神学院も「行くように手続きするから」という調子。

― 両親の反対とかは無かったのですか。

竹内 当時、うちの母が誰かに頼んで某大会社に就職が決まっていたから、ひっくり返るように反対されたよ。

― もし、神学院に行っていなかったらどうなっていたでしょう。

いますか。

竹内 やはり神学院の先生方と後藤主教でしょうね。特に後藤主教には便利に使われたね。でも、多分それは僕の特徴を掴んでたんだな。だって当時、宣教師引き上げの時に聖公会の代表として若造のくせに交渉などもさせられた。生意気なことと言ったけど、



主教が言えないことを僕に言わせただよ。(笑)

― それは、きっと先生の良さを生かしてくれたんですね。これから先、まだやりたいことなどはありますか。

竹内 いい本を探して日本語にしたいね。それも僕がというより、能力のある人に勉強

竹内 僕自身としては大学の時にイギリスの古い歴史につ

いて論文を書き、卒論も当時誰もやらないアングロサクソンの教会とローマ教会の論争について書いて、指導教授からは大学院に行かないかと、イギリスで勉強しないかとか言われた。神学院に行かず、そっちを選択していたら学問の道に進んでいただろうなと思うね。

― そうですか。今の先生のアカデミックな原点はそこにあったんですね。

竹内 でも、神学院に行って人生観が変わったね。当時の西校長はアメリカの日系の二世だったけど、新しい戦後の神学教育のために5人くらいのチームを率いてやって来て、僕たちの年代は厳しく鍛えられたよ。

― 今の神学院のシステムとは全然違うのですか。

竹内 そう、授業は英語だし日本語の本なんてないから、英語の本を3、4冊渡され、来週までにそれについて論文を書けとかね、とにかく自分で勉強しなければ誰も教えへ

のきっかけを与え、その人をサポートしたい。

― 今の聖公会について何か思うことはありますか。

竹内 歴史にしても礼拝学にしても小さなトピックをかいつまんで何か言う人は多い。でも基礎を積み重ねて学んでいる人は少ないような気がする。僕の事を古いと言う人も

いるけど、海外に行けば古いと言われることからすべてを全部知っている人が一番先端的だったりする。すべてのものには歴史があって、何故そうなるのが分かる。

― 最後に若い聖職に望むことなどあればお願いします。

竹内 礼拝一つにしても何故そうするのか、基本的なことをしっかりと勉強してほしい。

また牧師は常に思考回路をオープンに、創造力や想像力を働かせてほしい。こうだと決め付けてかかると失敗することが多いと思う。

― 今日はどうもありがとうございました。

竹内 なんだか、これが活字になるかと思うとぞっとするね。(笑) (文責・広報委員会)

「司祭のこの一冊」

『新たな旅立ちに向かう』

(渡辺正男)

日本キリスト教団出版局

2011年刊

司祭 山口千寿

著者は、三年前に引退し、今年、七五歳になる牧師職の方です。農村伝道神学校の教師を経て、日本キリスト教団の五教会で奉仕をして来られました。還暦を迎えてから専任牧師を迎えることが難しい小規模教会で仕えることを志し、二つの伝道所を教会になるまで導かれました。



教会

前半は、週報に掲載された二四編の説教要旨、後半は、実際に礼拝で語られた説教十編が収められています。

「世阿弥の、『入舞』という美しい言葉が眼に止まりました。舞い人が、舞い終わって舞台から引き揚げる時に、もう一度舞台に戻って、名残を惜しむかのようにひと舞い、舞ってから引き揚げる。その

ことを『入舞』と言うのだそうですね。老いの入舞ですね。」(まえがきより)

著者の関心の在処を暗示する言葉ですが、実際の説教の中でも同じ言葉が語られています。「死と復活という新たな旅立ちに向けて、天上の祝福の希望を抱きながら、自分なりに、ほんの少しでも、主イエスに聴き従うような老いの入舞を舞ってみたい。そう願わずにはおれません。」(一二五頁)

の高齢化が将来への不安材料のように語られます。しかし、そうでしょうか。老境に入った能の名手が、壮年の役者には及びもつかない深い境地に達した能を演じて観衆を感動させるように、信仰生活においても「老いの入舞」が、この説教集のように易しく優しく語られるならば、深い静かな喜びが教会の命を燃え立たせるのではないでしょう。

ガリラヤ各地を巡り、多くの病人を癒されたイエスの評判が広がる一方、それを快く思わないファリサイ派や律法学者の人々は、イエスについて「悪霊の頭の方で悪霊を追い出している」「汚れた霊に取りつかれているのだ」といううわさを立てていました。

安息日の規定をはじめとして、律法についてのイエスの姿勢は、すでに彼らの注目を惹いていました。

しばらく前に『聖書を開いて』② 見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。

司祭 山野 繁子

さんの人々に囲まれ、話しが盛り上がっていたのかもしれません。群衆が互いに肩を寄せ合うような雰囲気、イエスの話に耳を傾けている最中でした。

「母上と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます」と知らされたイエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とは誰か」と逆に問い返し、周りに集まっている人々を見回して言われます。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」(マルコ3・34)多くの人々がイエスを囲んで集まり、新しい生き方に向かつて目を輝かせている様子が、マルコの描写を通してわたしたちにも伝わってきます。「神の御心に結ばれた家族」が、それ以後、多くの共同体を作り、現在でもイエスの祈りと力を受け継いでいるのではないでしょう。

カフェ・エクレシア訪問記 広報委員

読者の皆さんは司祭がマスターのカフェと聞いてどんなことを思い浮かべますか？ 昨年6月に開店後、間もないある夏の夕刻。雨のせいかな薄暗く、直ぐには目指す店がみつからない。住所を頼りに歩いていくとほのかな灯りが見え、それが目指すカフェ・エクレシアであった。入口の扉に貼ってあるのはイベント案内。扉はカフェには珍しい引き戸。1、2段下がるところはもう李司祭の世界。牧師がマスターのカフェ？と勝手に想像した光景はあっさり裏切られた。質素ながら確かな目で選ばれたテーブル、椅子が並ぶ。壁には夫々物語がありそうな絵画、写真新聞記事など。「李司祭やるな！」とうならされる。サプライズはそれに留まらない。ベীগールをのせたプレート、コーヒーカーップ、漂ってくるコーヒートの香り。李司

祭のこだわりがちらばめられている。長居歓迎のさしずめニューヨーク市、ソーホー地区のアングラカフェか。百聞は一見に如かずである、皆さん！

あれから半年、野次馬根性を發揮してその後の進展を確認しようとする。マスターの忙しい時間を避けて—toにかく働き手は一人しかいないのだから— 午後の昼下がり。入り口の雰囲気はそのままに、メニュースタンドが道行く人を誘う。ランチメニューにティーマニュー。

開店前とその後の変化について伺う。「経験そのものが学びである。色々試みてメインとサブになるものを見極め、メインプログラムとサブが支え合いながら基本的な経営が可能になる事が見えてきた。いずれニュースレターも発刊したいが、それには人材と資金が必要。理念を理解し、ある程度自主的に役割を果たせる人が必要である」どなたか手を挙げてみませんか？



宣教の前線での活動です。

「最も大切にしたい事が信徒神学講座。聖職者の不足が顕著な今、信徒が宣教にもっとコミットするためには神学を体系的に学ぶ事が欠かせない」。そのためにこの4月から始められた神学講座の受講生の数は目標の6名をはるかに上回る14名とのこと。待ちこがれていた講座のようである。継続中の韓国語講座は3つ、生徒数総計15名。現在も募集中。

今後の予定は、今秋ないし冬に車による移動販売の開始で、購入資金の積立を含めて準備中である。先ずは李司祭自ら一年間経験してノウハウを蓄積したいとのこと。開店当初の借入金も全額返済済みで、着々と前進していることを実感した訪問であった。

カフェ・エクレシア マスター 司祭 李民洙

2011年カフェ・エクレシアを始め一般のお客さんを迎えてからもう10ヶ月がたちました。何もかも一人でしなければならぬ状況の中、経済的自立のために必死で働きました。しかし、考えてみると、一人でやったのではありません。沢山の方々が献金、祈り、カフェへの訪問など励ましがあつたことが先ずありました。浅草聖ヨハネ教会の方々はじめ、教区の関係者および直接・間接的にかわつてくださった全ての方々に心から深く感謝いたします。何より、神様は私を一人にさせず常に見守ってくださっていることを身を以って感じています。

カフェ・エクレシアは自由の霊性を求め、「Commensalis」(Sharing of the Table)の宣教理念の実現を目指しています。自由の霊性は神様が人間に与えてくださった想像力を活かすようにと励ましてくださる

のだと感じています。カフェとしての美味しい食べ物と飲み物、さまざまな文化活動、研究会など学問的作業、それに祈りと黙想会などがバランスよく行なわれること。そしてこれら全てのプログラムが「Commensalis」(テーブルを分かち合う、テーブルは食卓、聖餐式のテーブル、として解釈することはもちろん、神様が私たちに与えてくださったこの地球そのもの、自然そのものをも意味します。)の宣教理念にまとめられることを目指しています。まだ、安定するまで時間がかかるかと思っていますが、何となくこの1年間の経験を通して少し目処が付いてきました。今年の年末ごろには、カフェを企画する初めから考えていた計画のためにもう一歩踏み出したいと思っています。今、

そのために全力を注いで準備しています。それは移動販売車の購入で、私自ら直接移動販売車の中で販売したいと思っています。お楽しみとして関心を以て祈ってください。

第1回U26集会

聖アンデレ教会 鈴木みのり
管区の青年活動グループ「U26 (ゆーじろー、26才以下の青年)」の集まりが、今年の2月17・18の2日間、各教区から34名が集まり千葉の少年自然の家で行われた。

今回の集会では、二日間にかけて「若者が教会に行く理由・行かない理由」と「各教区で行っている活動・これからのような活動をしていきたいか」について話し合い、各自でまとめて発表しました。

まず、なぜ教会に行きたいと思うのか。少人数グループで分かれて議論していると、私が思いもしなかった面白い意見がたくさん出てきました。全員に共通したのが、以下の二つの理由です。

また少数派の意見の中には、聖歌をきくのが好きで、聖歌を聴きた



行く、というものもありました。単純に聖歌をきくと心が癒されたり、元気になったりするのだそうです。また、小さいころから毎週日曜日は教会に行くのが当たり前になっていたので、日常の習慣として毎週教会に行っている、という意見もありました。

そして、私たちが注目していた若者が教会に行かない理由は、話し合っていくうちにひとつの結論にたどり着きました。

それは、小さいころに教会に来ていた子供たちも、中学、高校に上がるにつれて部活やバイトなどで忙しくなり、日曜日の午前中に礼拝に出るよりも優先するものができ、若者の中で教会という場所がそれほど魅力的では無くなっているということです。教会に行くよりも、友達と遊んでいたほうが楽しい、バイトをしていたほうが学べることが多い。そ

んなシンプルな理由から若者は教会に來なくなるのだという結論になりました。つまり、私たちU26のこれからの課題は、若者の教会離れを防ぐために、若者から見ても教会が魅力的なものにするにはどうしたらいいのか考えることだと思ひます。

夏の「合同こどもキャンプ」

東京教区日曜学校連絡会では、8月10日(金)から12日(日)にかけて、清里フォレストーズ・キャンプ場を会場に、「合同こどもキャンプ」を行います。へあそぼう、みつげよう、清里の森でというテーマのもと、参加するこども達が、キャンプのプログラムを通して、また自然の中で、大切な気づきと体験をしてもらいたいと願っています。



このキャンプの目的は三つあります。参加者に自然の素晴らしいところ、友達に出会ってほしいということ、そして神さまといっしょにみんなで過ごす喜びを感じてほしいということ。このキャンプの開催に向けて、現在スタッフ達は、参加するこども

達の楽しさに輝く笑顔を感じ浮かべながら、安全で楽しいキャンプの準備を進めています。このキャンプを企画し主催する東京教区日曜学校連絡会は、東京教区信仰と生活委員会のかつての子ども部会から、発展的に活動を始めた自主活動です。「子どもの声が溢れる教会」を目指し、各教

会の日曜学校の働きが深められることを目的として、情報交換、学

びのプログラム、交流行事の開催等の活動を行ってきました。この夏の「合同こどもキャンプ」を通して、こども達と教会の出会いがさらに強められ深められますことを願っております。「合同こどもキャンプ」の開催を覚えてお祈り下さい。

スタッフ代表・司祭 高橋 顕

《6月の奉献先から》

東京教区の神学生

3名の新入生を迎えて聖公会神学院の2012年度が始まった。1年生から3年生まで全学年が揃うのは4年ぶりのこと。自然と心組み、時には歌など口ずさんでいる自分に気付いて苦笑する昨今である。聖公



会神学院の空気はとても良くなった

と思う。空気が良くなると風通しも良くなり、人間もおのずと良くなるはずだ。そこで切磋琢磨し、精進する。これまた悦びである。今の神学院、大変な財政難の中にあることを知っている方もおられるだろう。と言つても、お金の問題ははいたしたことではない。問題は人だ。これは私の信念でもある。少なくとも人に恵まれること、これほどありがたいことはない。

さて今日与えられたのは、「東京教区の神学生」という誠

にカタイ題である。それを力たくなく、面白く書くようにという編集者の難しいお願いなのだ。そこで仕方なくこんな風に書き始めたのだが、私が言いたいのはこのすばらしい「人」の中に、もちろん東京教区の神学生、阿部ゆりさん、太田信三さんもチャンと入っているということだ。字

数の関係で具体的に紹介できないのは残念だが、二人の努力と真剣さと真面目さ、暖かく、ユーモア溢れる人柄を知っていただきたいと思う。褒め過ぎと思われるかもしれないが、校長の私が言うことなので本当であることは間違いない。この二人を支援し、理解し、私たちが共に育てていただきたい。これが皆さんへの私からのたつてのお願いである。

〈花散るやチャペルへ急ぐ

神学生 和文〉

聖公会神学院 校長

司祭 広谷和文

《7月の奉献先から》

海の主日って何？

「海の主日」は、年に一度「船員」という仕事に従事している人々へ感謝を捧げる日である。何故なら、我々の身近

で毎日必要とする食物・衣類を始め、機械部品や燃料など、すべては船員達によって海から運ばれてくるからだ。

船員達の多くはアジアの国々からやって来、常に高い技術と仕事への熱意をもって働いている。しかし現実には、長期間家族や友人と離ればなれになり、更に上陸できるのは2〜3時間程度などといった過酷な労働条件下に置かれている事が多くある。

こうした状況を踏まえて、The Mission to Seafarers, Stella Marisやキリスト教系のボランティア団体は、船員達を支援する以下のような活動を行っている。

- ・船員を歓迎し慰問する訪船活動
- ・船舶から関連施設へのバス送迎サービス
- ・施設内における通信機器の使用を提供する

・施設内の遊戯具の利用や、寄付された衣類等の無料譲渡やラウンジでの飲料サービス

・常設のチャペルと日曜礼拝及び船舶への牧師や神父の派遣等

そうして、これらの活動に不可欠なのが、船員達に対する温かい歓迎と笑顔である事を思い出してもらう日が「海の主日」である。

船員への支援は教会にとって重要な仕事であり、他の活動と同じようにやりがいがある。

るという事を改めて皆で考えて欲しいと思う。

実際の活動に参加できなくても、「海の主日」は、ぜひ船員達のために祈りを捧げよう。神戸教区聖職候補生

ポール・トロハースト

◇編集後記◇

今回掲載した香山司祭、鈴木みりさんの文章は今の若い人たちの思いを知る助けになると思います。長年教区事務所で働かれ広報でも大変お世話になった麻田奈々子さんが3月末で退職されました。この場を借りて感謝を申し上げます。(W)

ちょっと聖書、ときどきユーモア (一)

1. 炎の舌？

信徒A「聖霊降臨日には、弟子たちの上に炎のような舌がとどまったという不思議な出来事がおきたんだよね。」

信徒B「それなら僕もそんな体験をしたよ。」

信徒A「君も聖霊体験をしたのかい。」

信徒B「いやこの前、激辛カレーを食べたら、舌が炎のようになったんだよ。」

2. 学びの多い説教

信徒「先生、今日の説教はすごく学びの多い説教でした。」

牧師「それは嬉しいですね。よかったら、どんなところが学びになったか聞かせてください。」

信徒「そうですね。人の話を聞くことの難しさ、理解することのたいへんさ、それになにより忍耐を学びました。」

3. 仲良しの秘訣

牧師「あなたたちのご夫婦は、いつも仲がいいですね。何か秘訣でもあるんですか。」

信徒「特に秘訣はありませんが、お互いイエスの教えを守っています。」

牧師「ほう、それはいったいどんな教えですか。」

信徒「はい“あなたの敵を愛しなさい”です。」